



定本版

山本有三全集

第十一卷

新潮社版

編纂

土屋文明

高橋健二

\*

題字

土屋文明

随筆・評論(2)

.....

© Hana Yamamoto.  
1977. Printed  
in Japan.

乱丁・落丁本は、ご  
面倒ですが小社通信  
係宛て送付下さい。  
送料小社負担にてお  
取替えいたします。

山本有三全集第十一卷

定価三〇〇〇円

昭和五十二年四月二十日 印刷  
昭和五十二年四月二十五日 発行

著者 山本有三

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒100 東京都新宿区矢来町七  
業務部・〇三二六六―五一  
編集部・〇三二六六―五四  
振替東京四一八〇八番

印刷所 二光印刷株式会社  
製本所 神田加藤製本

山本有三全集 第11卷 目次

隨筆・評論

へおみおつけへほか

おみおつけ

小人国

へ芥川君の戯曲へほか

芥川君の戯曲

当分原稿御依頼謝絶

西郷と大久保

沢田君

（雑誌「新潮」掲載短文）

新聞社はあやまらなくてもいいのか

いずこに訴えん

序に代えて

われらの主張の根本要旨

婦人雑誌

やど屋のまくら

「嬰兒ごろし」漫談

二〇 二五 三 三三 三七 三九 四一 四三 四五 四七 四九 五〇 五二 五三 五五 五七 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

バラック建築

四

興味とは何か、問題とは何か

五

研摩会得の道場

六

直木君の最後

七

文学士道弁

八

新人の芽ばえを

九

「ウミヒコ・ヤマヒコ」について

一〇

卒業製作選集のあとに

一一

（芥川龍之介賞経緯）

一二

検事の論告と「女の一生」

一三

近衛公を語る

一四

（人生に熱意を写し出す人びととなれ）

一五

「土の茂作」を推す

一六

火の赤十字の作者

一七

〈もじと国民〉ほか

この本を出版するに当たって

一八

改訂版のはじめに

一九

「ふりがな廃止論とその批判」のまえがき

二〇

国語問題の検討

もじと国民

〈竹〉ほか

ロハス大統領と神保中佐

「銀河」のはじめに

戦争放棄と日本

竹

教育費について

立候補に際して

「文化」の役わり

農業と文化

露伴翁の永眠に對して

人間菊池

（原作者の言葉）

『大和巡礼』を手にして

投票日に思う

〈アメリカと直線〉ほか

アメリカと直線

一四

一五

一六

一七

一八

一九

二〇

二一

二二

二三

二四

二五

二六

二七

二八

二九

|                    |    |
|--------------------|----|
| はなむけ               | 二二 |
| 「文化の日」がきまるまで       | 二二 |
| 金山の家のことなど          | 二九 |
| 思い出の六月             | 三四 |
| 紀元節について            | 三四 |
| 三鷹の思い出             | 四九 |
| 母の思い出              | 五〇 |
| 実行不可能の条件           | 五八 |
| 石川さんを思う            | 五九 |
| からっぽ               | 六一 |
| 佐藤さんと緑風会           | 五五 |
| 自然は急がない            | 六九 |
| （私が最も影響を受けた小説）     | 六九 |
| （祝辞）               | 七〇 |
| 死にべた               | 七五 |
| （国立国語研究所創立十周年記念祝辞） | 七五 |
| うちの三代目             | 六一 |

座談・対談

徳富蘇峰氏座談会

二六三

国語国字の問題

二六六

『昭和の動乱』をめぐって  
自分に落第点を

二六八

編集後記

高橋健二

二七三

山本有三全集第11卷



〈おみおつけ〉ほか

## おみおつけ

もう二十年も前の話である。たしか八月の末ごろと思うが、やけに日の照り込むきたない校舎で、東京中学の入学試験を受けたことがある。今は上級には途中入学を許さないそうだが、そのころは、五年の二期にも飛び入りを許した。私はその試験を受けに行ったのである。文部省の検定試験を受けてもいいのだが、それよりは、このほうが、ずっとらくだと思ったからだ。しかし唱歌と体操とを除いたほか、中学でやる学科は、英・漢・数はもちろん、地歴から物理化学、動植物、鉱物、生理衛生、図画、何から何までの試験を、三日間のあいだに、午前午後ぶつ通して、一どきにやられたのだから、ひと通りの苦しさではなかった。ことに、私はその一、二年まえまで小僧に行っていたので、順序だった学問というものをなんにもしていなかったため、一層つらかった。わずかに神田の正則英語学校と予備校とで、速成に中学の学科を学んだのを唯一の力として、試験場に臨んだのであった。

そんなわけだから、私はずいぶん無理な勉強をした。今でもときどき、あの当時のようにふん張ってみたいと思うことがあるが、どうしてもあんなむちゃなこととはできない。それは、学問をやることに反対だった父おやに対する反抗心があったからだ、一つにはいっしょにいた野村という、いいライヴァルがいたからだ。野村とは正則で知り合いになったのである。ふたりとも貧乏だった

ので、へや代を半減するために、六畳のちいさなところに、いっしょに自炊をやっていた。それは神田・小川町の路地の奥の、大工さんのうちの二階だった。震災まえ、あのへんを通った時、間借りをした家はどのあたりだったかしらと、ちょっと捜してみたが、その場でさえ、もうすっかりわからなくなっていた。

ごはんは下でたいてもらって、おかずはこっちでこしらえることにしていた。が、お互いに手がかかることをきらって、毎日、煮マメかつくだ煮でまに合わせていた。おかずを買いに行くことや、食事のあとかたづけなどは、一日交替でやっていた。

野村は海軍兵学校志願で、軍人になろうというくらいの男だから、体格はすてきによかった。どちらかというと、ねばるほうのたちではあるが、あたまがずいぶんよかった。英語でも、数学でも、小僧あがりのほくよりはずっとできた。しかし、彼に負けるのはくやしいので、ほくは自分のからだには無理と思われるくらい勉強をした。入学試験にパスするようということよりは、野村に負けないようにという考えのほうがはるかに強いくらいだった。

「どうだ。これ、できるか。」

なんて、野村に代数の問題なんか出されると、そんなものは中学の試験には出っこない、むずかしい問題なのに、さし迫った試験の準備はそっちのけにして、それを解くことに熱中するのだった。いっしょにいただけに、何かにつけ、野村が競争あい手だった。

午前は英語、午後は予備校にかよい、夜は一時から二時ぐらいまで勉強した。そして朝は五時という、もう起きだして机の前にすわった。けれども野村は、ほくよりも試験の期日が迫っていないのにもかかわらず、いつもおそくまで起きていて、しかも、朝はほくよりもっと早かった。けさこそほくのほうが早いだろうと思って目をさましてみると、彼はとうに起きていた。学問の上ば

かりでなしに、勉強のしぶりまでが、どんなにやってもかなわないので、しまいには、ほくはくやしいよりは、野村が憎らしくなってきた。

試験の最後の日のことである。その日は幾何だの、動植物だの、生理だの、図画だの、科目の多い日だった。ほかのものはどうやらこぎつけたと思うが、幾何が一題どうしてもわからないので、それが気になってしかたがなかった。ぐったりして宿に帰ってゆくと、

「山本か。」

と、野村が二階から声をかけた。

「うん。」

「はしご段に気をつけろよ。」

あい変わず横柄な口ぶりだった。

「どうしたんだい。」

あがりながら自分が尋ねた。

「そこにナベがかかっているからさ。」

見ると、はしご段をのぼりきった三尺の板のまに、シチリンをすえてナベがかけてあった。縁がわのないこの二階では、シチリンはここよりほかにすえるところはなかった。私はぎしぎしするはしご段をそうつとあがった。

「きさま、試験で疲れたろうと思ったから、きょうはおみおつけをこしらえておいた。」

もういく日、ふたりはおみおつけを吸わなかったことか。自分が当番の日で、きょうはおみおつけを吸いたいなと思う時でも、時間が惜しくて、そんな手のかかるものは、ついに一度もこしらえたことがなかった。野村ときた日には、おかずがなんにもなくなっているのに、買いに行く時間さ

え惜しがって、

「おい、山本。きょうは塩をかけて我慢をしろ。」

なんて、平気で言いだすほど極端な男なのに、それがきょうは思いがけなく、シチリンに火をおこして、おみおつけをこしらえてくれたのには、ほくはちよつと動かされた。

「そりゃありがとう。ほくはずいぶんおみおつけが飲みたかったんだ。」

「ほくもさ。こいつを吸うと精が出るからな。——おい、きょうの幾何はどうした。」

「一つわからないのがあるんだ。」

「どんなの。」

自分は問題を示した。

「これかい。」

野村は軽く、そう言った。こんなもの、なんでもないじゃないかというような、例の彼のそぶりが、ちらとひらめいた。ほくはくやしかったけれども、できなかったのだから、黙っているよりほかはなかった。

しかし、野村にもそうすぐには解けなかった。なんどもやりかけては消していた。

「ちよつとやっかいな問題だろう。」

「う、ひねってある。しかし、できないことはないよ。」

彼は鉛筆の先をなめながら、なお問題を見つめていた。

その時しゅつと、何かがほとばしるような激しい音がした。ふたりとも幾何に氣をとられて、すっかり忘れていたのだが、おみおつけが煮えこぼれたのである。

「おい。ナベ！ ナベ！ ナベ！」

と、野村はとんきような声を出して叫んだ。しかし、やはり机から離れなかった。

私はあわててナベのところへ飛んで行った。しかし、突然のことだったものだから、フタを取ればいいものを、ナベをおろそうとして、そのふちをつまみあげたので、

「あちい！」

と言ったまま、ナベをその場に取り落としてしまった。さいわい、やけどはしなかったけれども、ナベを落としたので、そこらじゅうをすっかりおみおつけだらけにしてしまった。そのうえ、はしご段の下は押し入れになっているので、こぼれたしるが板のつぎ目から、押し入れの中にだらだらたれて行った。

下のおかみさんはその騒ぎに驚いて、急いで押し入れの物を取り出した。が、それでもまに合わなかったと見えて、

「あら、ふとんにも、かやにもかかちまったわ。——あら、あら、こっちのほうまで流れて。」

ことさら、あてつけに言っているわけではないのだろうか、押し入れの中をかたづけながら、おかみさんがひとりごとのようにぶつぶつ言っていることが、私にはたまらなかった。

おみおつけをこしらえてくれたことはうれしかったが、こうなると、なまじっかおみおつけなんかこしらえた野村が、かえってうらめしかった。「こんなものさえこしらえなければ、……」私は自分の粗相はたなにあげて、そんなことをしきりに思った。煮マメだけ、またはノリのつくだ煮だけで、ほかには何ひとつおかずのない、乏しい毎日の食事のほうが、私にはどんなになつかしかったかわからない。

それよりも何よりも、自分が最も気になったことは、試験の最終日におみおつけをこぼしたということだった。試験の前後はだれにしても縁起をかつぎたがる時なのに、試験場から帰るや否や、